
永劫の志

曇坂陽向

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永劫の志

【Nコード】

N5200V

【作者名】

曇坂陽向

【あらすじ】

甲陽鎮部隊と名を変えた新選組。敗走に敗走を重ね、試衛館からの同志も一人ずついなくなっていた。そんな中会津にたどり着き、土方と斉藤はある晩、酒を飲み交わす。2人のそれぞれの想いとは。

（前書き）

斉藤一メインです。

できるだけ史実に近づけるよう
努力はしておりますが、
史実のイメージを壊されたくない方は
お読みにならない方が
良いかと思えます（＜|＞）

では楽しんでお読みください^^

―時は、慶応4年。

会津若松城下の旧幕府軍の陣では、敗走した旧幕府軍側の兵たちが傷を癒していた。

（暗い）

斉藤一は、いつにも増して夜が暗いと感じた。

ふと見上げると、縁側の屋根越しに見える空は、月は無論、星1つ見えない。

ただ重そうな雲がうねうねと空を覆っているのみである。
とにかく蒸し暑く感じた。

（あれは…）

門を曲がると、縁側に座る人影が見えた。
あの長身に、豊かな髪は…

「土方さん」

「……」

新選組副長…もとい、今は局長であるのだが、その人は土方歳三だった。

最近彼が着始めた洋装ではなく、着流しを来ている。こんな時間であるから、当たり前ではあるが。

「斉藤か」

物思いに耽っている風だからか、酒を煽っているからなのか、気付くのになんか時間がかったようだった。

「飲んで、大丈夫なんですか」

土方は酒に弱かった印象があった。

「そこまで飲んでねえよ」

確かに、見た目には酔っているようには見えない。

「…そして、今は斉藤ではなく山口です」

「いいじゃねえか、斉藤で。出会った時から最近までお前は斉藤だったんだ」

土方は2人の時は偶に間違えて斉藤、と呼ぶことがあった。

「……」

若干の沈黙。斉藤はこのまま通り過ぎるか迷った。土方の様子も少しおかしく思えたが、何と云っても、土方と自分2人で話が弾むとは思えなかったからだ。

「斉藤、お前も飲め」

何故かお猪口がもう一つ転がっている。

「はい」

土方に誘われたのは少し予想外だった。斉藤は素直に従う。別段話を弾ませなくとも、男2人、無言で酒を飲んだって、それはそれで良いものだろうとも思った。

土方の隣に腰掛け、生温い風に吹かれる。

「斉藤、」

「はい」

斉藤はおかしい、と思った。やはり様子がいつもと違う。

「総司が死んだ」

「……」

思わず声が漏れそうになった。別に漏れたところでそう支障は無いが。

——何にしても、この男は一体なんなのだ。

あまりにサラッと言つてのけるものだから、少し思考が遅れた。やっと思考が追いついたと思えば、急に強い目眩がした。

「……そうですか」

覚悟はしていたつもりだが、こうも目眩がするとは、自分の覚悟はこんなに薄っぺらい物だったのかと思わされる。

「今し方手紙が届いた」

「そうなんですか」

（この人も今知ったのか）

「目眩がするんだが」

「俺もです、副長もですか」

「……」

土方が少し驚いたように、斉藤を見る。

斉藤の返答が意外だったらしい。

「俺とて人です」

「そりゃあ俺も人だが」

人の死の報せの後、よくここまで淡々と渴いた会話ができるのか、2人自身ですら疑問だった。

「遂に俺達だけになっちまったな」

この台詞こそ、意外や意外。

「…はい」

（試衛館の同志のことか）

斉藤は土方に乗った。いくら土方だろうと、またいくら斉藤であろうとも、何故か1人になりたい気分ではなかった。とにかく、気持ちの整理がつかないのだ。こんな2人だから、表にはほとんどわからないが。

「…はい、って…お前は昔っから本当にかわいげがねえな」
酒の力か、いつになく饒舌である。こんなにくだけた話をするのは一体いつ振りであろうか。

（本当に少ししか飲んでいないのか？）
そんな疑問を抱くほどである。

「それは…よく言われますが」

「平助も一番若かったですよ」

斉藤も、酒が廻ってきた。

「平助は歳相応だ、ありや。元氣過ぎてうるせえくらいだったか」

「永倉さんと原田さんがいなければもう少し静かだったかと」

斉藤も土方も、いつの間にか微笑んでいた。

「確かにな。俺と近藤さんは手を焼かされたもんだ。新八と左之も
暴れまわってたな。総司は総司でありやあ元氣だった」

「沖田さんも俺達とそう歳は変わりません。それに山南さんも源さ
んも手を焼いていたように見えましたが」

「山南さんは皆を甘やかしすぎなんだよ、俺も含めてな。源さんは
普段寡黙な癖に怒ると手が付けられねえ人だったな」

「はい…2人とも誠に面白い方だった」

「新八と左之はどうしてんだか」

「あの2人はそんな簡単に死ぬタマではありませんよ」

「…だな」

すると一瞬、土方の目が鋭く前を向いた。

「お前は生きろ、斉藤」

「……。」

何を言い出すのかと思えば。

「平助は越したが、総司の歳も、近藤さんの歳も越してやれ」
土方は更に酒を飲む。

「しかし土方さん、あんたの歳を越すのだけは御免だ…一生俺の上
司でいてください」
自分は何を恥ずかしいことを言っているのか。しかし、不思議なこ
とに、今は何の抵抗もない。

「ははっ、言ってくれる」

こうやって笑う端正な風体の男は、恐らく、いや、必ず、最期まで
戦うつもりだろう。儚くなるまで、戦うつもりだろう。
無論、自らも最期まで戦う所存である。

「土方さんに、言わなければならんことがあります」
（明日にでも報告するつもりだったが、この際）
今言おうと、決めた。

「…なんだ」

「俺は会津に残ります」

「……………」

土方はやはりそうか、とでも言いたげに笑う。

「俺は、会津に恩を返さなければならない。新選組を受け入れ、何度も我らに手を差し伸べて下さった容保公に」

「ああ。会津への恩返しはお前に任せる。お前なら…俺も安心して北に行けるってものだ」

土方と斉藤は同時に空を見上げた。

（月明かりが…）

いつの間にか少し雲が薄れ、美しい三日月が見えた。星も少しだが煌めいている。

「永倉さんも原田さんも、間違っている」
「…？」

「俺は近藤さんの新選組を、新選組の志を、貫き通す…。俺は新選組から離れたりしない。俺は会津の地で…誠という志と共に、戦い抜きます」

「ああ、頼んだぞ」
土方は目を瞑り、また笑う。

「遂に1人になっちまうのか」
「それは俺も同じです」
「ま、元気でやれよ」
「副長も、どうかお元気で」

(声、が)

震える。

どうかしていたのだ。
土方にしても、斉藤にしても。

(この場合、どうかしている方が正常だろう。致し方あるまい)

こつも人前で感情を抑えられなくなるのは、幼少の時代以来である。

「……。」

2人とも、何も言わなかった。

ただ、顔をぐしゃぐしゃに崩した2人の頬を生温い液体が伝う。

それが、最早何の為に流れるものなのか分からなかった。…心当たりが多すぎた。いや、その心当たり全てに対するものかもしれない。

「俺は、いつまでも…新選組副長、土方歳三だ」

「俺とていつまでも、新選組三番組組長、斉藤一だ」

あの時、別れの言葉は言わなかった。
また会おうなんて事も言わなかった。
ただ、それじゃあ、と言った。
また明日にでも会うような軽さで。

―時は、明治10年。

（土方さん、俺はあんたと同い年になってしまったよ）

「あんたの歳を越すのは嫌だと言ったのに…もうじきに越してしま
うではないか」

斉藤一は、また空を見上げた。

明治の、しかも、会津ではない、豊後の空だ。

雲一つ無い快晴だった。

斉藤は死ななかった。

会津藩が降伏しても尚、戦い続けた。

しかし、容保公からの使者に説得され、やむなく戦いをやめた。

（土方さん、俺はまだ戦い続ける。あんたのように、また戦い抜いてみたいと思う。俺は俺のやり方で、みんなを弔おうと思う）

永倉は慰霊碑を建て、新選組の汚名払拭に動いている。

それなら斉藤は…また、戦地へ赴く。

（もしあの世などと云うものがあるならば…俺は、皆に笑われているかもしれない。この俺が土方さんと同じ年なのだと…）

フフッと、斉藤は笑う。

そして、グッと、上を向く。

「行つて参る」

新選組三番組組長斉藤一。

彼はこれから明治の世を見届け、生き抜いてゆくのである。

e
n
d

（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！

ちなみに文中、

永倉や原田を批判するように
とられる場面があつたかも

しれませんが、作者は2人とも

好きです。物語上そのような形に
なってしまったので、

ご了承ください（<―>）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200v/>

永劫の志

2011年10月9日16時37分発行